

2026年新春

第83回「資本論を読む会」のご案内

DAS KAPITAL

☆次回は-1月27日（火曜日）午後6時30分からZoomで開催

第10章「固定資本と流動資本に関する諸理論(後半部)」[岩波文庫(四)p292~p316]



年末最後の第82回「資本論を読む会」は12月22日(月)に開催しました。参加者は久しぶりに増えて9名。第9章「前貸資本の総回転。回転の循環」と第10節「固定資本と流動資本にかんする諸理論。重農学派とアダム・スミス」の前半部(292pまで)をやりました。レポーターはSugiさん。第9章は前貸資本とか資本の回転とかの言葉は既出ですから、

理解はそれほど難しくはなかったと思います。と言うか…軽く、余り議論もなく飛ばしました。第10章は少し長いので、今回は前半部のみやりましたが、重農主義の論客ケネーと古典派経済学の父とも言われたアダム・スミスが出てきます。この前に勉強した「固定資本と流動資本」との区別について、重農学派のケネーは「原前貸と年前貸」とに区別するのですが、マルクスは「両極の前貸しの間」の区別は、前貸しされた貨幣が生産資本の要素に転化されたときに初めて生ずる(278p)が、ケネーはこれが分からなかった。しかし同時にアダム・スミスも「生産資本と流動部面にある資本(商品資本および貨幣資本)との、他方における固定資本と流動資本との…根本的混同」に陥っていると指摘している(283p)。…ようだ。もしかしたら私の理解が足りないかも…。とにかく、今回も無事に「読む会」は終わった！事務局としてはホッとしている。

懇親会の場合でも出た話題は、「第2資本論を読む会」の募集についてのメドと運営、「G33を再開してほしいとの声がある」など、他にも諸々あったように思いますが…。時を忘れて12時超えてから解散。次回のレポーターはKatoちゃん、お願いしますね。

「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coccan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから- Sugiさん

第9章 前貸資本の総回転。回転の循環

- ・資本の循環をバラバラの事象としてではなく周期的、連続的な過程としてとらえること。資本が周期的に出発点と同じ形態にもどってくる循環運動。それを“資本の回転”と呼ぶ。
- ・この資本の回転の期間(時間)は、生産期間と流通期間の合計である。資本家が価値増殖した資本を再び受け取るまで、資本を前貸ししなくてはならない期間である。
- ・機械が20回の生産期間にわたって用いられるならば、その機械は20回の期間にわたり毎回自分の価値の1/20を生産物に移転する。この機械の価値が、すでに部分的に流通へと入って行く一方で、この機械はその現物形態としては生産領域に固定されたまま残る。
- ・標準的な生産条件下では、流動資本の価値は1回転の後には補填され、すぐにまた次なる生産期間へと前貸しされなくてはならない。

第10章 固定資本と流通資本とにかんする諸理論。重農学派とアダム・スミス

- ・ケネーにあっては、固定資本と流動資本との区別は、原前貸(固定資本)と年前貸(流動資本)として現れる。彼がこの区別を生産資本すなわち直接的生産過程に合体された資本の内部における区別として述べているのは正しい」とマルクスは評価する。
- ・アダム・スミスにあっては、年前貸は流通資本に、原前貸は固定資本に転化されると、借地農業者資本に限らず生産資本の各形態に関係するとしたこと。